

都市近郊果樹農業の地理学的考察

——伊勢原市の場合——

吉野 秀美

伊勢原市は神奈川県のはぼ中央、新宿や横浜から鉄道等で1時間以内の都市近郊圏内に位置するが、一方で、占来の信仰の山、現在は一大観光地である大山をひかえ、市面積の2割が農地という地域でもある。

本論文では、伊勢原市の農業そして神奈川県果樹農業のなかで特異な位置を占める伊勢原市の果樹農業について、果樹産地化の過程、果樹生産物の販売形態、市域における地域性という3点から特徴をみた上で、伊勢原市における果樹産地成立の地理学的意義を考察する。

伊勢原市は戦後の新興果樹産地であり、現在栽培されている主な果樹は、ぶどう、なし、かき、みかんである。この中で最も栽培の歴史が長いかきは、川崎市から江戸初期に導入され、当地産のかきは栽培集落名にちなんで「子易柿」の呼称で当時から有名である。つぎに歴史が長いみかんは、県内各地でおきたブームに乗って、静岡や小田原から、明治末期に本格的に導入された。とはいえ、戦前の伊勢原市の農業の基幹作物はたばこと養蚕であり、果樹栽培はごく小規模であった。その戦前の果樹園も、農村恐慌とそれに続く第二次世界大戦ですっかり荒廃してしまったが、かろうじて残った果樹が戦後の産地化の本格化の礎となる。県の果樹農業政策に基づき、いちはやく昭和20年代にはぶどう、なしが、30年代には全国的なブームに乗ってみかんが導入され、果樹栽培面積は年々進行する耕地面積の減少とは逆に50年代まで増加しつづけた。こうして現在では地方大産地にはおよばないものの、県下で五指にはいる規模の果樹産地となった。

このような産地化の過程で、伊勢原市の果樹生産物の販売形態も変遷をたどる。昭和20-30年代にはほとんどが市場出荷が中心であった。だが、しだいに量に勝る他産地産との苦戦を強いられる

ようになった。そこで、昭和40年代以降、市場からの撤退を進める一方、「直売」（「個人沿道」「共同沿道」「共同出張」「農協支所」「駅前」の5つの型に分かれる）「産直」「観光」といった新しい販売形態へと移行していく。

ところで、伊勢原市域における果樹農業の地域性については、市域を7地区、52集落に区分した上分析を行った。まず、伊勢原市の果樹農業地域は、市中心部と西部である。2つの指標、果樹作目と販売形態によって、地区および集落ごとの特徴をみる。第一の指標では、市中心部の田中集落（伊勢原地区）はぶどう・なし・かきの3作目複合果樹栽培、西部の善波、栗原、坪の内集落（比々多地区）と北部の洗水集落（高部屋地区）はみかんのみの単一果樹経営、北西部の子易集落（大山地区）はかき・みかんの2作目複合果樹経営、市南西部の木津根、白根集落（比々多地区）はぶどう・なしの2作目果樹複合経営である。第二の指標では、伊勢原地区と比々多地区は「個人沿道」を中心とする「直売」と「観光」、高部屋地区は「駅前」、大山地区は「共同沿道」である。これらの地域性の形成要因として、地形・気候などの自然条件、労働力、経営面積、産地化の過程、交通条件の5項目が考えられる。

以上から、伊勢原市における果樹産地の成立の意義を、次の2つの視点から考察する。第一の視点、交通立地からは、国道246号線と大山街道が、伊勢原市の果樹産地としての誕生と発展、産地の性格づけに大きな役割を果たしたこと、第二の視点、周辺果樹主産地との関係からは、特になし・かき栽培と「沿道直売」、都市化の先進地川崎市との関係と、伊勢原市域での各果樹作目の栽培変遷と分布が周辺果樹主産地の勢力分布を如実に示していると考えられる。